

小特集・いま、戦争とどう向き合うか

この小特集では現在の課題に迫る書籍を選び、それをテーマにして、編集同人がそれぞれ自由なスタイルで執筆しています。今号のセレクトは、神山睦美著『戦争とは何か』（濠標、二〇二三年）と、佐藤優著『プーチンの野望』（潮新書、二〇二三年）、笠井潔著『新・戦争論 「世界内戦」の時代』（言視舎、二〇二三年）です。

ウクライナに対するロシア侵攻が日々のニュースで取り上げられています。また近年、東アジア（中国、台湾、北朝鮮、韓国、日本）の危うさも極まってきた状況です。これにフィリピンと中国の南シナ海での緊張関係も加えて考えるべきかもしれません。いずれにせよ、二十一世紀になって国際社会の調整機能が以前にも増して不全化しています。これを機会に今号の小特集は「いま、戦争とどう向き合うか」です。はたして私たちは生あるうちにふたたび戦争を体験するでしょうか。

「戦争なんてしない」なんて過信をしないために

池上貴子

界国家化するアメリカ」と、その屋台骨をロシア・中国・アラブ諸国が揺るがす「ポスト世界国家の時代」についての提言が印象に残った。

笠井潔の『新・戦争論 「世界内戦」の時代』では、「世

小学生からミリオタで、愛読書が「月刊丸」（潮書房光新社）だっただけあり、笠井氏の戦略や兵器に関する知識は相当なものがあリ、学ぶべきことが多かった。しかし一方で、系統的に戦争を考えることを好む姿勢が前面に出た

ために、戦争が他人事のようにまとめ上げられているのが気になった。

特に、「世界国家化」というワードを短絡的に受け取り、陰謀論に傾く読者が出ないとも限らないので注意が必要だ。たとえばウクライナ・ロシア問題にしても、民族のアイデンティティや地形的・地理的な要素、ヨーロッパを巻き込んだ歴史的な利害関係など複雑な要素が積み上げられて現在の情勢があると想像しておいた方がいい。

そのように感じるのは、つい先日、小泉悠の『ロシア点描 まちかどから見るプーチン帝国の素顔』(PHP研究所、二〇二二年五月)を読んだからかもしれない。俯瞰的に現代の戦争にアプローチする笠井氏に対し、小泉氏はロシアに暮らす庶民の生活様式や彼らの日々の感情を拾っていくことで、民族的な動態を掴むことに成功している。勿論、どちらが良いというわけではなく、理解は多面的・多層的な方が誠実だと思うのだ。何に對して? 生きることに対して。

だから、「戦争は悪だ」「戦争なんて二度としない」という言葉の正しさを理解しながらも、戦争を起こし戦争に巻き込まれていく「私達」の多面性について、考えておく必要があるのだ。

こんな傾向の「無理ゲー」を考える時に思い出すのは、

芥川龍之介の「首が落ちた話」(大正七年一月「新潮」)だ。戦場で首に一太刀を受け、心の底から自分の所業を懺悔した兵士「何小二」が、奇蹟の生還後に一転、無頼漢となり、ある日酒場の喧嘩で傷が開き、突然その首が落ちたという。

我々は我々自身のあてにならない事を、痛切に知って置く必要がある。実際それを知ってゐるもののみが、幾分でもあてになるのだ。さうしないと、何小二の首が落ちたやうに、我々の人格も、何時どんな時首が落ちるかわからない。

(『芥川龍之介全集』第三卷、岩波書店、一九九六年)

未来なんて結局誰にもわからない。「あてにならない事を、痛切に知って置く」方法は過去にしかない。だから、かつて戦争に傾いていった自分たちの複雑な過去を、平時から検証しておくことで、一本の綱が切れても複数の命綱が残っている危機管理体制を構築する必要がある。悲惨な戦争被害という一面からの照射だけでは、戦争回避の材料が足りない。歴史を掘り起し、なぜその戦争に参戦していったのか、政治は、軍部はどう動き、マスコミはどのような情報を出し、庶民はどう変わっていったのかを動的に探究する教育が望まれるだろう。そしてその成果を教科書に